九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

植民地期台湾における青年団政策と地域の変容 ： 台湾北部A街の一青年の事例から

宮崎, 聖子
福岡女子大学

https://doi.org/10.15017/2341039

出版情報：九州人類学会報. 34, pp.55-63, 2007-07-21. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

植民地期台湾における青年団政策と地域の変容
―台湾北部A街の一青年の事例から―

宮崎　聖子（福岡女子大）

キーワード　台湾、植民地、青年団、ライフヒストリー

目次

Ⅰ．　台湾における青年団研究の背景と本研究の目的
Ⅱ．　調査対象地A街と調査の概要
Ⅲ．　植民地期の青年団組織の概要
Ⅳ．　青年団員から勤行報国青年隊へ
　　――楊欽栄と立身出世
Ⅴ．　まとめ

Ⅰ．　台湾における青年団研究の背景と本研究の目的

台湾は1895-1945年のあいだ、日本の植民地であった。この間、台湾総督府(以下、総督府)は内地(歴史的用語として用いる)の日本人の青年団にならい、漢族系住民(以後、台湾人)に対しても青年団を組織させた。この青年団は、台湾の人々には日本の植民地支配を支えたというイメージをもってとらえられている。確かに青年団政策の実施は、戦後60年以上経った現在もそこに暮らす人々の間に分断や軋轢を残したように思われる。戦後台湾はかつて日本と敵対していた国民党の政権下に入り、戦前の青年団を調査することは当時の関係者の経歴を明るみに出すことにつながるためか、近年までほとんど研究がなされてこなかった。しかし台湾では1949年に敷かれた戒厳令が1987年に解かれ、その後の20年で急激に民主化が進んだ。また学術界でも台湾の歴史に正面から取り組もうという機運が高まった。

植民地の経験は台湾の人々の生活を大きく変化させたと思われる。筆者は、台湾の青年団の歴史人類学的研究を1997年頃から開始した。植民地期における青年団史を整理しつつ、1998年から台湾北部のかつてA街であった地域でライフヒストリーの聞き取りを含むフィールドワークを行っている。

植民地期をめぐる研究は台湾の歴史学が主として担っており、そこでは被支配者側の態度を「抗日」あるいは「親日」の二項対立にステロタイプ化する傾向がみられた。しかし、植民地は多様な人種や民族・階層といった属性を有する人々が否応なく交錯する「場」である。従って、葛藤や軋轢の中にある人々をステロタイプ化することには困難がつきまとう。そのような「場」を分析するには、文化人類学者ROSALDO[1993]、ORTNER[1996]、TSING[2004]らがグローバル化の中での調査地の出来事を分析した際に示したように、植民地の状況下においても同様に各エージェンシーについてのより緻密な考察が必要となる。本稿の目的は、ある男性の事例を通して、A街における青年団政策が彼の生き方や地域の社会関係に与えた影響と、彼にとっての青年団の意味について検討することである。ここではROSALDOのいうように社会構造の中にその人を位置づけるマクロな視点と、インフォーマント個人のロジックに寄り添うミクロな視点の双方から、植民地における出来事を眺めてみることとする。

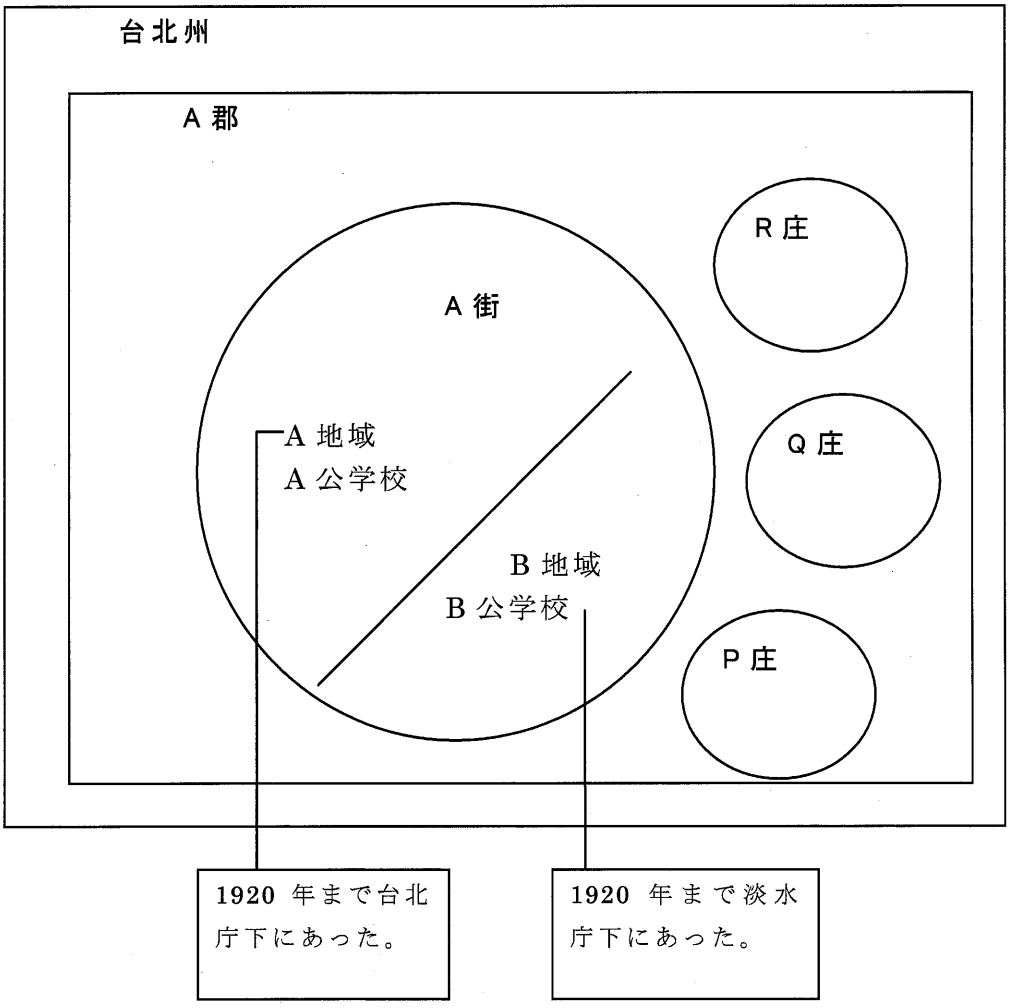
Ⅱ．　調査対象地A街と調査の概要

調査対象地域は、戦前に台北州(州は内地の県に相当する)A街であった地域であ

る。A街は1920年の地方制度改正によりA地域とB地域が合併して誕生した。1920-45年のA街に関わる行政単位は図1のとおりである。街、庄とは内地の町、村にあたる最小の行政単位である。当時A、B両地域にはそれぞれ初等教育機関にあたる公学校が総督府により設置されており、A街の校区は植民地期には一貫して二つに区分されていた。両地域は戦後再び分割され、調査当時は台北県A市と同B郷となっていた。街には大河川が流れており、植民地期以前には商工業の発達した港町として栄えていた。しかしその後沖積作用により川底が上昇して船が接岸できなくなり、街は衰退した。植民地期には移出品の目玉であるジャポニカ種の米の産地として、(以前ほどではないにしても)再び豊かになった。

植民地期以降のA街の人口は漢族(福建)系住民がその大部分を占め、1922年で16,000人あまり、1942年で20,000人あまりとなっている。また台湾人富裕層の層が厚く、日本人人口が台北州の中で最も少ない(1935年 1.5%)地域であった。戦後は台北市の衛星都市、ベッドタウン

図1　植民地期A街にかかわる行政単位(1920-45年)



となっており、他地域からの人口流入が激しい。

調査地の特徴としては、台北に近く働き口があるためか、戦前にA街に生まれた者の移動は相対的に少なく、複数の青年団経験者が存命であったことが挙げられる。また先述したように、植民地期においては、日本人人口が少なく日本人資本がほとんどなかったために、台湾人内部の対立も比較的小さかった。さらに戦後の1947年の二・二八事件[1)]で亡くなった人はほとんどおらず、事件の影響もそれほど大きくはない。

フィールドワークの期間は1998年8～9月、1999年5月～2000年2月、2000年7～9月、2001年1～2月、2002年2月、2003年4、11月である。調査では文献調査と併せて、青年団関係者や青年団を知る人を中心にライフヒストリーの聞き取りを行った。使用した言語はインフォーマントにより中国語、日本語、台湾語を用いた。会話は断って録音させて頂き、後に逐語的に文字化した。インフォーマントの発言からの引用は「　」で示し、台湾語で語られたものは表記の際に【台】、日本語で語られたものは【日】とする。なお、本稿で用いる地名、人名などはすべて仮名である。

Ⅲ.　植民地期の青年団組織の概要

台湾の青年団はこれまで一般に、1930年代後半から強制的に台湾人青年層を組織化したものと想像されていた。しかし資料を検討した結果、総督府は1910年代から地域の指導者層である台湾人エリートを教化することにより、青年団政策の基盤作りを始めていたことが分った。また青年団政策は内地の政策のみならず、戦争を含む国際関係、台湾人エリートの政治的・経済的力、学校教育やその他の青年訓練機関の政策によって規定され、数度にわたり転換していた。実際に政策を策定するのは州庁であったため、州庁ごとに政策の実施状況は微妙に異なる。本稿で焦点を当てるのは1930年代後半のことであるが、調査対象地域である台北州やA街の青年団は、そのあり方により1930年代後半までを4つの時期に区分できる。第1～4期は以下のような概要である。

第1期は台湾人による抗日武装抵抗が終息した1910年代である。この頃、地方の官吏が中心となって、台湾人エリートを対象に「同風会」や「家長会」などの名目で、弁髪や纏足を改める「風俗改良」や日本語の普及、科学・衛生知識の普及を主とする教化を行い、青年団政策を実施する基盤を築いた。この場合エリートとは、地域の「有力者」を指す。この概念は暫定的・相対的なものであるが、とりあえずここでは街庄レベルにおいて政治・経済力を有する者を指すこととする。具体的にこれらの人々は街の政治を決定する官公署の役人や街庄協議会のメンバーで(街庄協議会は1920年から設置)、地主、自営業者を兼業している者も多かった。

第2期は抗日民族運動が高まった1920年代にあたる。この時期に地方庁が主導し設置した青年会は、抗日民族運動の広がりを防ぐ役割を果した。この時期の青年会は地域の台湾人エリートと緊密に結びつき、富裕層の子弟を選抜して街庄のエリートへ養成する装置の役割を果していた。抗日派台湾人も青年団体を組織したが、各地で官製の青年会と対立した。

第3期は1930-35年である。総督府が青年層の統制に本格的に乗り出し、公学校を卒業した富裕層の少数の子どもを青年団に参加させた。また既存の青年会は青年団へ再編された。青年団員の多くは、都市部の中等以上の教育機関に進学せず(できず)、街庄にとどまった若者であった。青年団では、これらの若者をとりこみ、植民地支配の末端行政を担う官公署

職員や、植民地支配に協力する地主を養成しようとした。青年たちの多くは、街庄における地位上昇を求めて青年団に参加したものと思われる。

第4期は1935-38年である。1935年の地方制度改正と地方選挙によって、台湾人は「抗日」「親日」に関わらず植民地の政治体制に取り込まれ、同時に台湾人エリートは街庄長のポストから排除され、台湾人の政治的力も弱められることとなった。1937年の日中戦争勃発後、民心の掌握を狙った総督府は、各街庄の下部にさらに小さな行政・教化単位として「部落」（歴史的用語として用いる）を設置する。青年団はこの部落ごとに設置されるようになり、そのため青年団組織は拡大、団員は中下層出身者へ変化していった。この時期は、青年団で軍事的訓練（教練）が本格化し、青年団の性格が大きく転換する過渡期にあたる。青年団エリートの養成機関として勤行報国青年隊（後述）も出現する。次項で考察の対象とする楊欽栄は、第3期の終わりと第4期の青年団を経験している。

A街における青年団の事例を検討したところ、青年団政策の実施単位となったのが街であったことから、青年団のありようは街の政治に規定されていたことが分かった。青年団に参加した青年の社会階層は時期により異なり、従って彼らにとっての青年団の存在意義も異なる。特記すべきは、青年団がそのような変遷をたどりながら一つの地域に利害の異なる人々を生み出していったという点である［宮崎2003a］［宮崎2003b］［宮崎2006b］［宮崎2007］。

台湾人エリートが街の青年団に強い影響力を有していた1920年代から30年代初期には、彼らが富裕層出身の青年団員を指導し、比較的自律的に青年団を経営していた。団員は、青年団入団によって公学校を卒業しただけの者よりも優れているとみなされ、青年団という場で得られた台湾人エリートとの関係を通じて社会移動を達成することもできた。しかしその後、総督府は台湾人エリートの政治的、経済的弱体化をはかると同時に、青年団に対する彼らの影響力を排除する政策を実施した。台湾人エリート勢力の後退は、日本人指導者（主として公学校教員）の台頭、日本人支配の強化をもたらし、現場における青年団政策の貫徹を容易にしたと考えられる。特に教練の開始により、指導員が台湾人から日本人へ交替し、青年団の機能の決定的変化を招いた。

IV. 青年団員から勤行報国青年隊へ——楊欽栄と立身出世

本項では、1938年から台北州で実施された勤行報国青年隊に参加したB青年団員の楊欽栄（1915年生まれ、A街B地域出身）について考察する。彼の略歴を以下に示す。

楊欽栄略歴

1915年　B地域の名望家の家にうまれる。5人兄弟の末子。

1932年　17歳　公学校高等科を卒業するが、中学受験に失敗、家で農業を手伝う。

1933年　18歳　台北市の私立中学（3年制）に入学。

1934年　19歳　A青年団の楽団に参加する。結婚、国語講習所を開設。

1937年　22歳　B青年団入団、幹部となる。

1938年　23歳　元公学校校長の推薦により勤行報国青年隊に入隊。青年団指導者講習会に参加。

1939年　24歳　大日本青年団大会第15回大会（ソウル）に参加。保正（区長に相当）となる。

1940年　25歳　B信用販売購買利用組合の書記となる。後に幹事をへ

て戦後、農会監事、A 鎮民代表。

B 地域は 1920 年までは淡水庁下に属していたが、1920 年の街庄制施行後は、台北州の A 街に編入された。そのためか B 地域は A 街政下で冷遇され、道路などの基盤整備は後回しにされてきた。戦前のことについて知る人々によれば、A 地域と B 地域の人間は互いにあまり仲が良くなく、そのために戦後は B 地域が A 街から独立して B 郷（「郷」は現在の日本の町村の「町」にあたる）になったのだという[2)]。

当時の B 地域の楊欽栄のムラは、100 戸に満たない小さなものだった。楊欽栄の祖先は 200 年前に福建から台湾に渡り、B 地域の土地を開墾して住みついた。楊家は B 地域で最も旧い家とされており、居宅となっている美しいレンガ造りの三合院（コの字型の伝統的家屋）の住宅は、現在は古跡に指定されている。彼の父親は B 地域の富豪（地主、農業）で、保正（区長に相当）をつとめていた[3)]。楊欽栄は 5 人兄弟の末子として生れ、8 歳で B 公学校へ入学し、1929 年に 14 歳で卒業、A 公学校高等科を 1932 年、17 歳で卒業している。高等科をおえた楊欽栄は台湾での公立中学校（5 年制）受験に失敗し、そのときは日本に留学したい、中等以上の学校に行きたい、という気持を持っていた。当時台湾人にとって、台湾での中学校進学は差別的教育政策により日本内地での中学校進学よりも狭き門だったのである[4)]。しかし、父が末子の彼をかわいがり、「外へ出さなかった【日】」ので、しばらく家で農業の手伝いをしていた。その後、1933 年に台北の私立曹洞宗台湾中学林（3 年制）に入学した。

この学校はもともと曹洞宗関係者の子どもを教育する目的で 1916 年に作られたものであるが、経営に苦しみ 1922 年頃には廃校になることになっていた。しかし 1933 年頃、台湾人の教育への関心が高まっていることに鑑み、3 年制から 5 年制中学にむけて改組の準備を始めた。楊欽栄が入学したのは、（改正直前にあたる）3 年制の私立曹洞宗台湾中学林（以下、中学林）である。『台湾総督府学事年報』によれば入学資格は尋常小学校卒業であり、「簡易ナル高等普通教育ヲ為スモノ」に分類され［台湾総督府文教局 1934］、中等程度の教育とはみなされていなかった[5)]。すなわち中学林は、「中学校より一段劣る学校」とみなされていたのである。

彼が公学校を卒業した時、まだ青年団というものは B 地域にはなかった。1934 年、19 歳の時に彼は「バイオリンが弾きたくて」、陳昭南が指導し A 地域の人々を中心に組織されていた A 青年団の楽団に参加した。陳昭南はいわゆる街のエリートで、彼の父は前代の A 街長であり、塩などの総督府の専売品を扱っていた。陳昭南は第 2 期の青年団を経験し、その後街協議会や農会（農協に相当）の役員となっていた。楊欽栄が地元からそれほど近くはない A 青年団に進んで入ったのは、街の中心部である A 地域での人脈を作る目的もあったと思われる。楊欽栄によれば彼は中学林卒業後、街役場に就職することを希望していたが、願いはかなわなかった。街役場への就職は、地域のエリートへの登竜門を意味しており、街政の中心部へ近づくことであった。しかし村役場への就職には、台湾人エリートとのコネをより多く有する A 地域出身の若者が優先されていたようで、B 地域出身の若者（楊欽栄）は不利だったのである。

希望の職につけずにいたところ、A 郡役所のすすめで、楊欽栄は地元の人に日本語を教える国語講習所（歴史的用語として用いる）を開くことになった。地域の名望家の家は、資金を拠出し国語講習所を開設することを期待されていたのである。国語講習所を開く時、楊は父から 210 円を借りた。その後、総督府から認められ 150 円の「賞金」（助成金か）が出たの

でこれで父からの借金を一部返した。この時彼はすでに結婚し家庭の責任を負っていたが、講習所では文房具なども用意せねばならず、経営は金銭的に大変だったという。私立の国語講習所は楊欽栄のような名望家の立場や財力を流用しながら設置されたことがうかがえる。

彼がB青年団に入ったのは、1937年、22歳の時である。B青年団の指導者は台湾人の公学校教師たちであった。彼らは街協議会員、農会役員、後の皇民奉公会（内地の大政翼賛会にあたる）の幹部等を歴任した。いわゆる街のエリート、名望家である。この時はすでに青年団参加が義務的なものとなっており、楊欽栄は青年団幹部の役割を担っていたという。B青年団では教練のほか、娯楽としてのハーモニカ演奏などを行った。

B青年団を含む台北州の青年団では、1938年頃から集合に際して「検閲」が行われるようになる。検閲とは、地方で青年団の管理・指導にあたる者が、団員らの日頃の訓練について行進・整列の状態や服装の状況、口頭試問などについて実地検査を行うことである。楊欽栄によれば、ムラには彼より年上にあたる「壮丁団」の男性たちがいたが、彼らには「このような（整列や行進などの）訓練は（経験がないので）できない【日】」という。身体的なトレーニングのなされ方が青年団員と上の世代である壮丁団員で異なることについては、楊欽栄だけでなく他の青年団員も言及し、自ら誇りとするところである。台湾の人々の「身体」が青年団政策によって作り変えられている様子がうかがえる。楊欽栄はさらに、中学林時代に教練や体育を他の青年団員に先んじて経験していたので、それがこの青年団の訓練に役に立った、と誇らしげに語った。

彼は国語講習所を経営しながら1938年の台北州A郡勤行報国青年隊に選ばれて入隊し、何度か青年団指導者講習会にも参加した。勤行報国青年隊とは、規模拡大しつつあった青年団の指導を行う幹部、すなわち「青年団エリート」を養成するために、台北州A郡が設置したものである。（この台北州の勤行報国青年隊は、後に総督府が台湾全島に設置した総督府勤行報国青年隊の雛形となった。）講習は台北郊外の青年団会館で行われ、訓練では禊を行ったりした。当時青年隊の指導は日本人視学、野田が行った。野田は楊の母校であるB公学校の元校長である。日本語により教育を行う公学校は、植民地統治の最前線であった。楊欽栄によれば、彼の入隊は野田が推薦したものだった。翌1939年9月、楊欽栄は全島の青年団から選ばれて、京城（ソウル）で行われた「大日本青年団第15回大会」と、それと同時開催の「日満支青年交驩会」に参加した[6]。楊欽栄の人生の中で最も嬉しかったことは、この「青年団で抜擢された時【日】」であり、彼は「その後とんとん拍子にA郡の代表に【日】」なった。すなわち「立身出世」の道を歩み始めたのである。楊欽栄は勤行報国青年隊について「この時、B郷の指導者になる訓練を受けていたんだと思う【日】」と、当時を回想した。

勤行報国青年隊の訓練は、数か月という長期間にわたり日本人指導員と隊員が起居をともにして行うという、特殊なものだった。この訓練は、楊欽栄の価値観をかなり変容させたようである。彼は、当時の自分は「親日」であり、「地域の治安を守る者」であると自認していた。彼によればこの時代、B地域にも「無頼漢（ゴロツキ）」がいた。当時「無頼漢」は台湾語で老鰻 lo-moa【台】とも呼ばれ、このような老鰻はほぼどのムラにもいた。警察の資料によれば、彼らはよそのムラの裕福な者から金品を脅し取ったり、賭博で稼いだり、労働者を手配してその賃金の一部から収入を得ていた[鷲巣 1938]。

楊欽栄によれば、B地域の老鰻は楊欽

栄を日本人為政者の側に立ち自分たちを取り締まる者として敵視していた。楊欽栄は老鰻に襲われることを想定して、空気銃のような武器を常に準備していたという。楊欽栄と同じムラ出身の陳明伝（1929年生まれ）によれば、楊欽栄と敵対していたのは戴水連というB地域の老鰻である。戴水連は陳明伝の父のいとこと義兄弟の契りを結んでおり、楊欽栄と同世代の者であった。

老鰻は一般には自分のムラでは悪事をはたらかなかったという[7]。戴水連が悪事をはたらくのは隣のR庄においてであった。彼はR庄へ行って派出所の電線（通信用ケーブル）を切った上、そこで警察官に「説教をした」（陳明伝）こともある。当時警察は、台湾の人々からは日本支配の手先とみなされ、かつ畏れられていた。その時の警察官は台湾人であったと思われる。戴水連は、台湾人でありながら日本人統治者の下で働いている彼らに対して何か戒めるようなことを言ったのであろう。派出所を襲って警官を「説教」したというので、戴水連は「B地域の英雄」となった。彼は指名手配になり、捜索には地元の壮丁団の男たちが動員された。戴水連は自分の家の山中に隠れており、そのことはB地域の皆が知っていたが、壮丁団もそれに気づかないふりをした。彼が隠れている間、皆が食事を持っていって食べさせてやるのだという。

陳明伝によれば、A街には他にも老鰻がいた。彼らの中には公学校に在学していた人もおり、公学校に入れば日本語が一通りできるようになるのに、彼らは日本語をしゃべらずいつも台湾語を使っていたことが印象的だったという[8]。この話からは、当時、日本人為政者を基準にした価値観と、そしてそれとは異なる価値観がB地域に並存しており、青年団員や勤行報国青年隊員は「日本人為政者と同じ側に立っている存在」であることを、楊欽栄本人のみならず他の人も意識していたことが分る。それを最も鮮明に表したのが、彼と老鰻との敵対関係であった[9]。

勤行報国青年隊を経験した後の楊欽栄の「出世」は早く、B地域だけでなく、より上位レベルの地域の公職にもついた。1939年、24歳の時にはB地域で「最も若い（最年少の）保正」となり、翌1940年、B信用販売購買利用組合（農会の前身）に書記として採用され、一年後には会計担当となった。組合が後に農会となると、彼はその主事となった。さらに彼は農会の幹事となり、「中央」（台湾全島の農会を統括する中央機構）に派遣されたこともあるという。戦後は農会監事やA鎮鎮民代表（鎮民代表は、町会議員にあたる）を歴任した。

楊欽栄の経験には、組織拡大していく過渡期の青年団の性格が反映されているように思われる。1930年代前半までは、青年団はエリート養成の装置であった。楊欽栄は強烈な上昇志向を有していたが、しかし彼が参加した頃の青年団は義務制に近くなり、青年団入団によってはもはや立身出世は達成できない時代にさしかかっていた。まして彼はA街の中心部から遠く街役場にはコネの少ないB地域の出身であり、街役場へ就職するにはハンディがあった。その彼を勤行報国青年隊へ推薦したのは、かつてB公学校長であった視学の野田である。楊欽栄の勤行報国青年隊への入隊は、このような時代的背景や彼自身の社会的上昇への渇望、他人に負けまいとする競争意識、そして視学である日本人野田との再会によって実現したと思われる。

楊欽栄は戦後も公職にあったが、農地改革により、父から譲り受けた8甲（約8ha）の土地を国民党政府から没収されてしまう。その後いろいろな事業に手を出したが、なかなかうまくゆかなかった。現在は事業から引退して、短歌、漢詩、廟で行なわれる老人クラブの活動など、

趣味にうちこんでいる。

V. まとめ

1930年代後半において、青年団の州・庁レベルの統合が進み、台湾全島の統合が完成した。1937年の日中戦争開始後は、台湾人全体を教化対象とするため市街庄には部落が設置され、青年団の設置区域は公学校設置区域から部落単位へと細分化された。そのため、団員数が増えて組織は拡大し、教化の網の目はより細かくなった。団員は勤労奉仕と部落民教化の第一線となってはたらいた。青年団政策の変化はA街にも反映され、青年団の団員数は約3倍に増えた。台北州では他にさきがけて長期合宿訓練を行う勤行報国青年隊を創設し、ここで地主層の子どもを中心に、彼らを青年団幹部へ養成した。青年団が義務制に近くなったことから、街レベルのエリート養成装置としての役割を、青年団にかわって勤行報国青年隊が肩代わりするようになったと考えられる。

そのような時代を生きたのが、本稿で取り上げた楊欽栄であった。彼はインタビューの中で、戦前や現在の自分のことを「私は親日だ」と半ば自嘲的に語ることがあった。戦後の台湾には、植民地支配が遺した日本文化に親和的な高齢者を蔑視する風潮があり、彼の自嘲的な態度はその反映であろう。しかし彼の生き方を単純に「親日的」と受け取ることはできない。彼の選択は、地主の家に生まれたものの中等以上の教育を受けられず、勤行報国青年隊入隊によることでしか社会的上昇の途を得られなかったという植民地の状況に規定されていた。言い換えれば彼の生には、特定の抑圧の下で特定の利害を持つ台湾人が、おのおののやり方で活路を見出そうとした側面が示されていたといえる。

参照文献

CHING, Leo
2001 Becoming "Japanese" : Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation. University of California Press.

HUANG, Chih-huei
2001 "The Yamatodamashi of the Takasago Volunteers of Taiwan: A Reading of the Postcolonial Situation", Befu, Harumi and Sylvie Guichard-Anguis eds., Globalizing Japan: Ethnography of the Japanese Presence in Asia, Europe, and America. Routledge, 222-250.

ORTNER, Sherry B.
1996 Making Gender : The Politics and Erotics of Culture. Beacon Press.

ROSALDO, Renato
1993 Culture & Truth: The Remaking of Social Analysis. Beacon Press.

TSING, Anna L.
2004 Friction: An Ethnography of Global Connection. Princeton University Press.

WOLF, Margery
1968 The House of Lim : A Study of a Chinese Family. Prentice Hall.

WOLF, Margery
1972 Women and the Family in Rural Taiwan. Stanford University Press.

五十嵐真子・三尾裕子編
2006『戦後台湾における＜日本＞――植民地経験の連続・変貌・利用』風響社。

台湾総督府文教局

1934『台湾総督府学事第31年報』(昭和7年度分)。
宮崎聖子
2003a「青年会から青年団への転換——台北州A街の場合(1926～1934年)」『日本台湾学会報』5:21-41。
宮崎聖子
2003b「植民地時代の台湾における青年会の成立過程(1910-1926)——北部台湾A街の事例を中心に」『日本の教育史学』46:163-181。
宮崎聖子
2006a「元台湾人志願兵における「植民地経験」」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における<日本>——植民地経験の連続・変貌・利用』風響社 61-92。
宮崎聖子
2006b「植民地台湾における青年団の変容——1930年代後半の諸制度との関連を中心に」『日本台湾学会報』8:22-41。
宮崎聖子
2007「日本植民地下の台湾における青年団——1940-43年の制度面を中心に」『日本の教育史学』50(印刷中)。
鷲巣敦也
1938「無頼漢の取締に就て」『台湾警察四十年史話』松浦屋印刷部 200-214。
周婉窈
2003『海行兮的年代——日本殖民統治末期台湾史論集』允晨(台北)
呉密察監修、遠流台湾館編著
2000『台湾史小事典』遠流出版(台北)

註

1) 1947年2月27日、台湾の台北市で闇市のタバコ売りの女性を密売取締員が殺傷する事件が起きた。これに端を発し2月28日、大陸からやってきた国民党に対して市民の大規模な抗議運動が台湾全土に広がった。しかし国民党政府は武力によりこれを弾圧し、多くの人を殺傷した。この一連の事件は二・二八事件と呼ばれる。この事件は、戦後に国民党とともに大陸からやってきた人々（「外省人」）と戦前より台湾に暮らす人々(「本省人」)の対立を決定的にした出来事であったともいえる。

2) B地域出身者への聞き取りによる。

3) ただし、保正の会合には日本語が分かる彼の二番目の兄が父親の代理で出席していたという。

4) ちなみに彼のすぐ上の兄は台北第二中学校の卒業で、いわゆる一番手のエリートである。

5) 1932年度の学科目は修身、仏学、国語及漢文、英語、歴史、地理、数学、理科、法制、経済、台湾語、体操であった。

6) 大会は9月16、17日の二日間にわたり京城で行われ、台湾からは青年団員30名が参加した。台湾の青年団員たちは台湾への帰途、日本に立ちより、鎌倉、京都、大阪、奈良など内地の視察を行った。京城と内地で撮った写真を、楊欽栄は嬉しそうに調査者に披露した。これらの写真に写っている青年団員はみな、ゲートル姿の制服である。

7) 陳明伝によれば、ある時彼が家の外に何かを置こうとしたことがあった。彼の母が「そんなとこに置くと戴水連が盗るよ」、と言うと、誰かが「だいじょうぶ、戴水連は自分のムラでは悪い事しないから」と言ったという。

8) このようなゴロツキを「老鰻【台】」と言っていたのは1930年代までである。後には「無頼漢」という言い方が一般化し、彼らは警察と対立もするが、時には警察の「スパイ」になって働くようになっていったという。

9) 興味深いことに、楊欽栄とほぼ同時代にA地域の青年団を経験し、A街役場で働いていた謝国輝も、老鰻についての同様の経験を語っている。